

僅か3年前、21世紀を迎えたばかりの世界は、希望に満ちた新たな社会を期待し、人々はさまざまな夢を語った。原子力や核からの開放も間違いなくその一つだった。しかし、2003年の今、世界も日本も何と暗い未来を見せつけられ、傷ついているのだろうか。テロと核が再び新たな恐怖と疑心暗鬼の暗闇に私達を引きずり込み、武力による自己防衛もやむ無しとの風潮を作り出している。いつまでも続く核との戦いを人類は克服できるのだろうか。

### 劣化ウラン弾の登場

劣化ウラン弾は原発の燃料製造の際に出る廃棄物が原料である。原発燃料はウラン235だが、これは鉱山で精製したばかりのウランには0.7%しか含まれていない。99.3%は燃料にならないウラン238である。これを高速増殖炉でプルトニウム239に変え、新たな原発燃料として使おうというのが、もんじゅ計画の目指した「核燃料サイクル」である。しかし、これは事実上世界的に破綻した。日本もいずれ撤退せざるを得ない。核燃料として使えないから「劣化ウラン」である。アメリカやイギリスは、この有り余る核廃棄物を砲弾に利用した。鉄の2.5倍も重い金属で、分厚い戦車の装甲をも打ち抜くためだという。しかし、着弾の際の高熱で、劣化ウランは蒸発し、微粒子として大気を汚染する。劣化ウランといっても放射性物質に変わりはない。アルファ線とガンマ線を出し、周りを被曝させる。半減期45億年のウラン238は地球誕生時からまだ半分にしかなっていない。人間が地下から採掘しなければ、永久に地下に眠っていたはずのものである。劣化ウラン弾は1991年の湾岸戦争に始まり、その後のコソボ紛争やアフガン攻撃、そして現在のイラク戦争でも大量に使われた。湾岸戦争では戦車や戦闘機、大砲、ミサイルなどから95万発の劣化ウラン弾が発射された。今度のイラク戦争ではそれをはるかに上回る。

### 被害は累々

湾岸戦争後、イラクでは兵士ばかりでなく子ども達

の癌や白血病が激増した。英国医学会機関誌によれば、イラクでは戦争前の1989年に比べて1994年には癌発生率が7倍に増加した。イラクでは約1万人が劣化ウランにより癌になったと推定されている。その他、無脳症や水頭症などの先天異常児も戦争前の3倍に跳ね上がった。戦争に参加した米英軍兵士もまた被害者である。アメリカでは湾岸戦争に従事した58万人の兵士のうち31%にあたる18.2万人が退役軍人省に白血病、癌、腎臓病などの疾病補償を求めているが、米国政府はこれを認めていない。イラク戦争でこうした被曝による被害はさらに増えるだろう。戦闘は止んでも止むことのない戦争、これが劣化ウラン弾による被害である。チェルノブイリの被害に何と似ていることだろうか。

### 小型核兵器開発に歯止めを

最近、アメリカは対テロ戦争のためと称して、小型核兵器開発を決めた。従来の核兵器はウランやプルトニウムの連鎖反応を持続させる「臨界量」の限界のため小型化できず、もっぱら大量破壊兵器として「抑止力」にその役割があった。「使えない事」こそが最終兵器としての核兵器の価値であった。しかし、その壁を越えて戦場で使える兵器を目指す。これこそまさに際限のない核拡散への道に他ならない。アメリカができることはいずれ他の国でもできる。既に核を持つ国がそれを放棄できないことこそが核拡散の最重要課題であり、拡散の口実を正当化していることを忘れてはならない。

(河田)